

第8回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

流雲静かに

萩原 淑之（静岡県島田市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

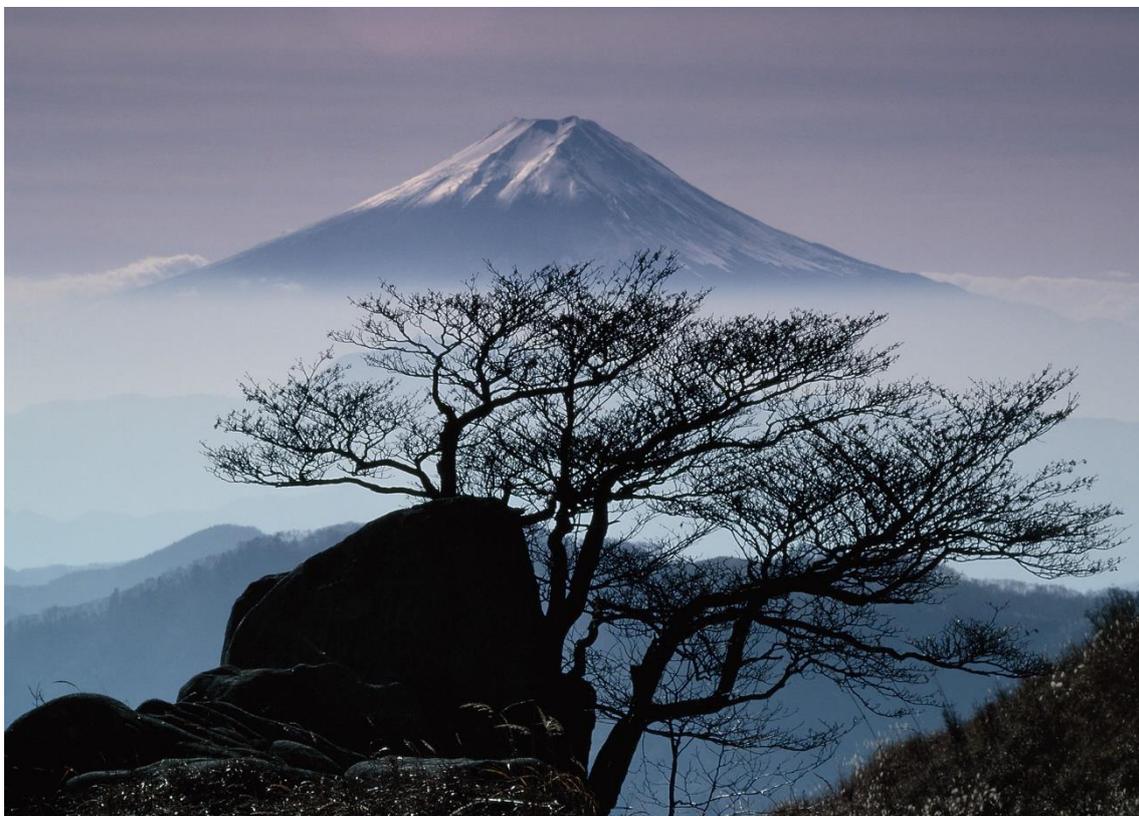
作者は異なるが同構図の作品が他に数点あったが、富士山の画面に対しての大きさ、バランス、色彩再現、すべてにおいて一頭地を抜いていた。他の作品は富士山がもっと小さかったり、光のあたり具合がすくなかったり、色再現も不十分であり、かつ画面のバランスを失っていたとはいえ、それなりにすぐれてはいた。しかし、これだけ高度の作品が出品されると喧嘩にならない。手前から徐々に明るみを増す前景の山、その頂点にまさに旭光を浴びて君臨する富士がある。その色再現は文句のつけようがない。中景にたなびく雲の明るさも位置もびたりと決まっている。格調高いみごとな作品である。

推薦

静寂

八巻 長子（山梨県中巨摩郡）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

一見地味に見えるが、実に力強く、高度で味のある作品である。女性にしてはしっかりとした画面構成によって以前から注目していたが、今回はそれが集約された感がある。若干カメラポジションを左方に移していたらさらに整ったろう。前景のシルエットとなった茂みと岩、これによって色彩の乏しさをコントラストの強さで補っている。富士山の尾根にひときわかがやく光が、この作品の仕上げをして、まさに画竜点睛といったところ。この傾向をさらに推しすすめて行っていただきたい。

推薦

一瞬の輝き

高津 秀俊（山梨県大月市）

高川山



白簾史朗氏講評

富士山上に出現した三蓋笠、折よく朝の光に色づいたチャンスをみごと捉えた。赤味がもっとあればと欲が出るが、これだけは誰にもどうもできない。しかし、これだけ画面コントラストがあれば効果充分といえる。山体を大きく入れこむことによって、画面は重厚かつ力感が表現された。的確な焦点距離設定はつね日ごろからの研鑽によって培われる。強いていえば、もっと下方の暗部を少なくして上空へのぼした方が、笠雲と朝の光の表現により効果的であったろうと思う。だが、やはりオーソドックスの強味を証明するようすくれた作品といえる。

特選

錦秋

小林 隆宏（静岡県庵原郡）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

実にすばらしい条件に恵まれたものと思う。狙っていてもなかなかこうしたチャンスには遭遇できないものだ。だが、これは運もあろうが、やはり作者の努力を買いたいし、またそのチャンスをもものにできる腕がなければ何にもならない。運、努力、技術の3拍子がそろってはじめて傑作が生まれることをこの作品が証明している。全体の構成もよく、色再現もよいが、殊に中景の尾根のたたみこまれたあたりの色再現は抜群である。これで富士山に雲でもあったら、これこそ！といたくなる。次回も期待したい。

特選

初冬の朝 奈木 正次（静岡県沼津市） 滝子山



白簀史朗氏講評

さすがベテラン、まことにむづかしく、撮りにくい滝子山のアングルを、みごと自家薬籠中のものとしている。大蔵高丸や雁ヶ腹摺山のように適当な前景物もなく、尾根のたたずまいも単調なこの山からの富士山を、ただ何のケレン味もなく、まっすぐなカメラアイで捉えている。こうしたアングルは実はもっとも難しいのである。条件の不利・有利を審査の基準に加えられるなら、さしずめこの作品はもっと上位に推されることになる。選者が作者に望む点は、もうすこしアップに、左右と下部をつめたもの、である。

特選

川霧 境 実 (神奈川県相模原市) 岩殿山



白簾史朗氏講評

非常に富士山の高さを表現した作品といえ、それは、作者のいう桂川から立ち昇る川霧によって、大月の市街がかくされたことによる。同時に富士山と中景の雲にあたる朝の光が視覚的な遠近感とともに縦の遠近感、いわゆる高度感を表現したためである。岩殿山から望む富士山は、つねに大月市街が眼下に大きくひろがって俗な画面となるが、この作品はそれをみごとに克服している。若干露光がオーバーであるので、半絞りほど切りつめるとさらにコントラストがつき、色彩的にも有利となったろうと思う。

入賞

明けゆく富士

小谷 加代子（三重県松阪市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

特選「初冬の朝」とまったく同傾向の作品で、一見滝子山からか、と思うほどだが、三ツ峠山の尾根の線と富士山との関係で別と知れる。めずらしくアップとしたため雁ヶ腹摺山かららしくなくなったが、その分力が増して強い作品となった。写真はそのときどき、自分が感じたものを表現すればよく、それがこの写真によく出ている。

入賞

初夏の訪れ 佐藤 知津夫（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白籟史朗氏講評

新緑に配する残雪の富士、いかにも初夏らしくすがすがしい写真だ。通常、緑色のモチーフは意外と暗く、反射率が低いため、残雪に配するとなかなか合わないものだが、やや薄晴日だったらしく、双方の露光値がピタリと合っている。典型的な逆いの字構で安定感があり、見ていて楽しい。こうした明るい作品もこのコンテストに必要なものである。

入賞

秋色 根津谷 正和（山梨県甲府市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山にしてはまことにめずらしいアングルの作品で、それだけに作者の意欲と苦勞が表現されている。手前のススキの穂のかがやき、中間の雲海、それに浮かんだ富士山と、いかにも晩秋近い空気感がある。やや露光オーバーのため、中間の雲の調子が失われたこと、空部が少し広すぎるものが難であるが、久しぶりスッキリした作品であった。

入賞

朝霧焼ける 天野 昭吾（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山に隣接する姥子山からの富士山は、前景の尾根がやや右に寄るので、そこをどうして埋めるかがカギとなる。この作品は谷から湧いたガスをそれに充てた。さらにそれに重ねて葉の落ちた樹枝を入れこんでいる。ガスだけで充分といった感じで、枝は蛇足の気味があるが、色彩的に美しい再現がなされていて快い。ベテランらしい作風。

入賞

夜明け 遠藤 潤（山梨県東八代郡） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

しっかりとした構成、適確な色再現、雰囲気描写で、山の夜明けを表現した。強いていえば富士山の雪の部分がやや描写不足（オーバー）だが、とり立てていほどの欠点ではない。何と云っても全体の雰囲気バランスの良さが何にもましてよい。この調子で今後も押して行ってもらいたいもので、これを他の条件に通用させてこそ本物となる。

入賞

夏の山稜

境 実（神奈川県相模原市）

大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

ダブル受賞の作家らしい安定した撮り口を見せている。実にすっきりと晴れた朝で、手前からつづく雲海が夏らしい雰囲気を十分に描写している。全体の構図としてやや広く写しこみすぎているので、少し右方と下部を切ってスッキリさせたい。右下の影の部分は不要。それによってさらに夏らしい表現が生まれてくる。

入賞

秋の趣 高村 茂（山梨県富士吉田市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

まさに秋まっ盛りといったところで、趣きなどいうものではない。題名には注意したい。しかし、作品はみごとにまとまっていて、他に同工異曲の作品が2、3あったが、その中ではもっともすぐれていた。紅葉の色彩再現、全体の色バランスは絶妙であり、文句のつけようがない。ただ、富士の大きさに比して紅葉がうるさい。右3分の1を切るとよい。

入賞

朝日に染る

大塚 康夫（神奈川県津久井郡）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

笹子雁ヶ腹摺山とは、また撮りにくいところへよくでかけたものだ。まず、その労を多としたい。なかなかこのむずかしい富士山をしっかりと捉えたものだと思う。ただ、富士山の左の稜線に突き出た鉄塔が気になる。もっと先に進んだ方がよかったと思うがどうだろう。それと、もうすこしアップにして、手前の山腹もようと組み合わせてもみたい。

入賞

雲海の彼方 山崎 哲男（山梨県北都留郡） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

すっきりとした気持ちよい作品だ。撮影ポジションの奈良倉山が低いので、どうしても雲海が高く昇り、富士山が小さくなるが、それを上手にカバーしている。前景の樹も1本なのがよい。必要最小限のモチーフのみで構成したため、さして好条件といえないものが生きた。樹の右の枝の部分を少し切ってフレーミングするとさらによくなる。

入賞

しだれ桜と富士 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

桜と富士、春風駘蕩ということばがまことぴったりするような作品である。左から垂れ下がる花枝、右方遠くかすむ富士山、これぞ日本の代表的ともいえる構図である。難というもののまったくない作品であるが、どうしたことか、6×7判を35ミリ判の割合で切っているためバランス上、下部が少し足りない感がある。フルサイズでの構図を期待。

入賞

街なみの彼方に 伊藤 茂（静岡県駿東郡） 百蔵山



白簀史朗氏講評

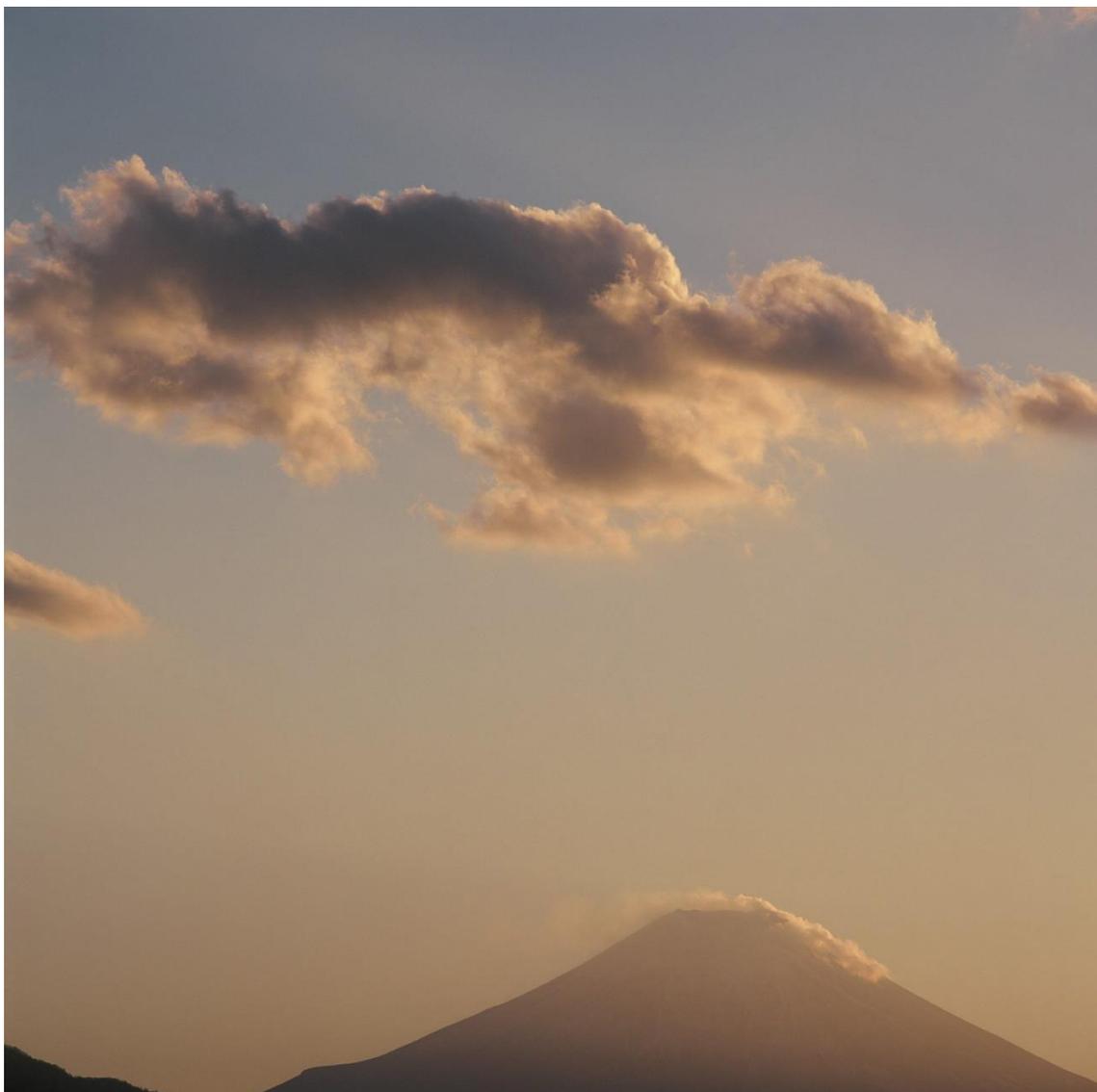
暗い谷間を一路つづく光の帯。左から右端にいたって左曲、蛇行して富士に向う。その富士はいま朝の光に赤く焼け初めた。はるかにもつづく道を富士に至る心理的効果を狙ったもので、暗い中から明るさに向う効果をよく心得ている作者だが、惜しむらくは右方がちょっとだけ多い。光がつづかなくとも、大月の街の灯りをカットする必要があった。

入賞

冬至まぢかく

伊藤 昶（東京都杉並区）

岩殿山



白簀史朗氏講評

思い切って下部をカット、富士山を夕焼け雲だけの単純な構図とした。岩殿山からは下方に街並みが入りこみ、どうしても俗になるので、このように大胆なカットか、逆手をとって夜間の灯火を入れこむのか、である。単純すぎて、やや単調のきらいがあるが、富士山に吹きなびく旗雲と上空の雲の形が、その単調さを救っている。

入賞

雲湧く 高津 秀俊（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

これは前景をうまく処理した見本のような高畑山の作品で、ダブル受賞のうちの一点である。右手から左下に落ちる尾根の線、左中上から右にのびる尾根、その先に富士山がある。中間の谷に雲が入ったため、この2本の尾根の走りが明確になって画面が生きた。左方をほんのすこし、上部もすこしつめるとさらに整ってくる。

入賞

黄昏を背に 山田 岑士（山梨県大月市） 高畑山



白簗史朗氏講評

高畑山は前景の処理が難しいので、どうしても撮る人がすくない。今回も第7回より1名すくなく、作品数も1点すくない6点のみだった。その中の2点が入賞、そのうちの1点である。若干、夕べの太陽の部分が露光過度であるが、これはいたし方ない。色彩の美しさをもっと強調するため、左方の凹所から切つてのフレーミングが望ましい。

入賞

初冬の朝 高橋 利延（神奈川県相模原市） 高川山



白簾史朗氏講評

この作品も高質なものであるが、高津氏の「一瞬の輝き」と同じ高川山であるので、入賞に甘んずることになった。しかし、これも、もっとアップにして、この調子を保持していたら、果たしてどうなっていたかわからない。暗黒から富士山の赤熱にいたるまでの美しい調子は捨て難いものを秘めている。さすがは7回の最優秀賞作家といえる。

入賞

霧氷の彼方に 坂井 康朗（東京都練馬区） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

渋いながら捨てがたい味を持つ作品。第3回の推薦「早春」小林博氏の作品に一脈相通ずるところがある。これだけの作品をもってする腕がありながら残念に思うのは、富士山の入れこみが中途半端なことである。不要な右方部を5分の1切り、その分左へのぼしたらずいぶんとよくなったと思う。まことに残念というしかない。

入賞

春暁

瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市）

清八山



白簾史朗氏講評

春の富士山はあまり焼けることがないのがふつうだが、これはまたよく赤熱したものと思う。まれにこうしたことがあるから写真はやめられなくなるのかも知れない。赤熱の富士山描写にすべてを賭け、他のことに気を使わなかったことがプラスになった。つまり、手前も、富士の五合目までの山肌も捨て、雪肌の描写に露光値を絞ったわけである。

入賞

冬化粧 佐野 和彦（静岡県庵原郡） 清八山



白簾史朗氏講評

清八山にいたる林道上からの撮影であろうが、右奥の丸い山頂が利いている。だが、そこに立つ雪のついていないカメマツはあらずもがなである。光線状態、構図には難がないが、このカラマツと富士山上の細い雲がいただけない。少し考えすぎのところが、損をしている。だが、撮影技術はまことにしっかりしている。

総評

審査員長 白籬史朗

本年2001年を迎え、この大月市「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」も第8回となった。第8回の応募者総数56名、応募作品数は229点であり、昨年との比較で応募者6名、点数で10点の増加を見た。過去、最低の数であった第2回の30名足らず、点数も80数点にくらべると大幅な増加といえるが、まだまだ増加の余地があると考えたい。

さて、この第8回の審査は、本年1月22日午前10時より、審査員一同立ち会いのもと大月市役所に於いて開始され、午後1時30分、無事終了した。最優秀賞1名、推薦2名、特選3名、入賞18名、計24名それぞれが決定したが、ことにこの第8回から入賞部門が12名から18名に増加したため、非常にバラエティに富み、充実した選出となった。

最優秀賞は昨年の第7回同様、初応募の萩原淑之氏のものとなった。推薦は応募4回目の八巻長子氏と、同5回目の高津秀俊氏の受賞で、ことに高津氏は地元大月市在住の作家であり、入賞とのダブル受賞であった。

特選3名はこれまた初応募の小林隆宏氏、応募6回・最優秀賞3回の奈木正次氏、応募7回で特選1回と入賞2回の境実氏であり、境氏は高津氏同様、入賞とダブル受賞となった。

入賞者の内訳は、第1回から連続応募で推薦1・特選2・入賞5と過去7回すべてに入選の大ベテラン井上和夫氏、同じく8回応募で入賞3回の天野昭吾氏、応募7回で特選1回・入賞3回の高村茂氏、第3回からの常連、推薦・特選各1、入賞3回のベテラン遠藤潤氏、同じく応募6回で入賞2回、山崎哲男氏と入賞1回の伊藤昶氏、第4回から連続応募で特選・入賞各1回の瀬瀬浩恭氏、応募3回で入賞2回の大塚康夫氏と初入賞の伊藤茂氏・小谷加代子氏、応募2回で第7回から連続入賞の佐野和彦氏と初入賞の佐藤知津夫氏・山田岑士氏、第7回最優秀賞の高橋利延氏、初応募の根津谷正和氏・坂井康朗氏、の諸氏である。

まことに残念なのは、第2回から連続応募で特選2、入賞4の女性ベテラン作家・松里房子氏、入賞1回ながら応募6回の服部康司氏、初回から連続8回かささず応募され、入賞4回の加藤公男氏、同6回の加藤泰郎氏、最優秀賞1・推薦2・入賞3回の佐野文隆氏、最優秀賞1・推薦2・入賞3回、小林博氏、特選1・入賞3回の広瀬雅英氏、特選1・入賞4回の北沢清行氏らで、今回ついにおよばなかった。

その他、山賀一男氏、坂本和義氏、小俣武氏、小林和義氏もいま一步のところ
で涙をのんだ。

各人が応募した作品の撮影場所は、例年に比して、若干平均化したとはいえ、やはり1番と3番が依然として多く、次いで6番と8番であり、5番・7番・11番とつづく。何といても不振なのは2番と4番、それに今回は9番・10番・12番、若干上向いたとはいえ、まだまだすくない。ただ、今回の収穫といえるのはアプローチの不利な山頂にも応募者の眼が向いていることで、これが今後プラスに転じてくれることを祈りたい。

応募作品が特定の山頂に集中することは、いつもいつも上位入選作品が、その山頂からのものとなって、このコンテストの意図にそぐわないものとなるおそれもある。応募者の方々もそのことを考えていただき、万遍なく、すべての山頂からの富士山を応募して下さることをお願いしたい。

落選作品中には、いつも辛評するように、まだまだ構図、色再現で不備なものが
多い。それと、ただ単に派手な色彩のモチーフのみを追い求めることも同様である。何といても入選作品はその質によって決まることを再認識して下さることを願っている。